

政党政治と政権パターン

——フランス第五共和政の連合政権——

岡 沢 憲 芙

目 次

- 1 権力の司祭者＝政党
- 2 単独政権のパターン
 - A 単独・独占型政権
 - B 単独・過半数政権
 - C 単独・少数党政権
——以上二一号——
- 3 連合政権のパターン
 - D 最小勝利連合政権
▽西ドイツの連合政権
——以上三二号——
 - ▽フランス（第五共和政）の連合政権
——以上本号——
- 4 連合の理論と連合交渉
 - E 過大規模連合政権
 - F 過小規模連合政権

▽フランス（第五共和政）の連合政権

第五共和政

一九五八年にド・ゴールの手で形態と実質が与えられ確立された第五共和政は、第三共和政（一八七〇～一九四〇年）、第四共和政（一九四六～五八年）の苦い経験に対する反省をド・ゴールのカリスマ性を基礎に実体化しようとするものであった。実際のところ、第三・第四共和政下の政府は有効な作動能力をあまり持てず、政党政治は絶えざるものであった。分極化・破片化・不安定を経験した。G・サルトリのいう極端な多党制（分極的多党制）の典型的な症候群に苦しんでいた⁽¹⁾。政府が難局に直面し、議会政治の運営が行き詰りに逢着するであろうと予想されても、安定した有効な支持を積極的に与えようとする議会内過半数勢力はほとんど生まれなかった。そのため、第三共和政の七〇年間に九四の政権が、そして第四共和政の一二年間に一八の政権（一ヵ月もたなかった政権をも入れれば二三）が誕生し、崩壊した。これでは果断な政府行動は不可能である。議会を機能不全に追い込み、閣僚を困却させ、政府を崩壊させる手だて、手段は数限りなくあった⁽²⁾。

イデオロギー指向の強い政党は非妥協的な唯我独尊主義を振りかざし、プラグマティズム指向の強い政党は定かなき展望を持たぬまま原則なき野合を繰り返した。政党戦略家の思いつきや気まぐれですら政変の起爆力になる可能性があった。かくして、フランス政治史の記録保管所には、シナリオなき政変ドラマが生み出した膨大な政権リスト、閣僚リストが山積みされることになった。

「安定した強力な政権」の確立こそ第五共和政に課せられた至上命令であった。そこで、五八年憲法は、大統領に四つの政治的武器を与えた。(i)非常事態における大統領の特別措置権限（第一六条）、(ii)レファレンダム実施権（第一

一条)、(iii)国民議会解散権(第二二条)、ただし、その選挙に続く一年は、新しく解散を行なうことはできない、(iv)首相の任命権、閣僚の任免権(第八条)。問題は、巨大な権限を与えられた大統領がリーダーシップを発揮して、政権レベル、議会レベルで有効な政党間連合を形成・維持できるかどうかとなった。

少なくとも議会レベルでの連合形成過程がある程度単純化するであろうことは予想されていた。なぜなら、一九五八年からは、国民議会の選挙制度が従来の比例代表制から小選挙区・二回投票制に切り換えられるからである。この選挙制度の変更は、政党数を大幅に削減するであろう。実際のところ、制度変更の狙いは適中した。一方で、民意を歪曲しながらも、悲願であった「政党配置図の整序化」には成功した。(弱小政党の乱舞)という事態は一九六七年国民議会選挙の頃には、既に過去のものとなった。⁽³⁾今日でもフランスの政党政治システムは無秩序なイメージで描かれることが多い。だが、今では、考えられているほど異常ではない。今日でも無秩序なイメージを与えているとすれば、その無秩序は政党の数というよりもむしろ政党の内部的脆弱性に由来しているというのが真実に近い。⁽⁴⁾ド・ゴールが確立した新体制は、少なくとも「政党数の削減」については成功を収めている。

●ド・ゴールの連合政権

一九五八年九月に新憲法がレファレンダムで承認された後、一月二四日には大統領選挙人団によってド・ゴールが共和国大統領に選出された。登録選挙人八万一千七六一名のうち七万九四七〇名が投票した(投票率九七・二%)。ド・ゴールは六万二千九四票(七八・五%)獲得して圧勝した。彼はM・ドブレを首相に任命し、新体制下の政局運営にあたった。議会内でド・ゴール政治を支えたのはゴリストの《新共和国連合UNR》であった。だが、UNRの

表1：1958年国民議会選挙(1958.11.23/30)
(投票率77.1%)

政党名	得票率	議席数
PCF(共産党)	19.2%	10
SFIO(社会党)	15.7	44
急進派	8.3	32
(左翼・計)	(43.2)	(86)
MRP(人民共和派、中道派)	11.1	57
UNR(新共和国連合)	19.5	199
独立・農民国民中央派	22.9	} 133
その他	3.3	
(アルジェリア、サハラ)		(71)

* J. R. Frears, 1977, p.209.

議席数は一九九(議席占有率三六・一%)しかなく、議会運営については保守系の独立派議員の支持を期待せねばならなかった。五八年一月二三日、三〇日に行なわれた第五共和政下の第一回国民議会選挙で大量に当選した独立派議員(一三三名 議席占有率二四・一%)の多くは、ド・ゴールに「信頼できる支持」を与え続けた。絶えざる権力拡大論者であるド・ゴールが、こうした事態に満足するはずはなかった。憲法改正、国民議会の解散という二つの行動にそれがうかがえる。

一九六二年の憲法改正で、大統領選挙は大統領選挙人団による間接選挙から国民の一般投票による直接選挙に切り換えられた。ド・ゴールは圧倒的な人気を背景に国民と直接ドッキングし、議会越しにド・ゴール連合を形成して、それを議会選挙に逆噴射することができるようになった。中間から右の勢力にとって、彼は混沌と共産主義から国を守る至高の擁護者であり、社会主義勢力にとっては、軍事独裁政治から国を守る唯一の防波堤であった。当時のフランスにとっては、このカリスマ・リーダーを追い詰めることはそのまま政治危機の誘発を意味した。だが、カリスマはいずれ日常化し風化する。より有効な議会内多数派工作(議会レベルの連合形成)の必要はここから生まれる。

一九六二年議会選挙は、文字通りド・ゴールの攻勢選挙であった。アルジェリア戦争が終焉し、大統領暗殺計画が露見したドラマティックな夏が終わった時、ド・ゴールは大統領の正当性を継続・強化するための方策として直接選

表 2 : 1962年国民議会選挙(1962.11.18/25)
(投票率68.7%)

政 党 名	得票率	議席数(前回比)
PCF(共産党)	21.7%	41 (+31)
極左派	2.4	—
SFIO(社会党)	12.6	66 (+22)
急進派	7.8	39 (+7)
(左翼・計)	(44.5)	(146)(+60)
MRP(人民共和派、中道派)	9.1	55 (-5)
UNR(新共和国連合)・ UDT(民主労働連合)	31.9	233 (+34)
RI(独立共和派)	5.9	35
(与党連合・計)	(37.8)	(268)
その他	8.6	13 (-85)

* J. R. Frears, 1977, p.211.

挙制の導入を考え、それをレファレンダムに付すよう提案した。伝統的な議会政治家はこの提案に対して内閣不信任動議で対抗した。ド・ゴールは議会を解散した。⁽⁶⁾しかも、レファレンダムでは六一・七%がド・ゴールを支持した。ド・ゴールが圧勝するためのすべての条件が整った。実際、第一回投票では前回に比べ約一九〇万票上積みするのに成功した。だが、ゴリススト(新共和国連合UNR、民主労働連合UDT)が獲得できた最終議席は二三三議席(議席占有率四八・三%)にとどまり、単独過半数には達しなかった。

一九五九年以来、ドブレ首相に登用され閣僚ポストを与えられていたジスカールデスタンと彼が率いる《独立共和派RI》がド・ゴール連合に接近・加入した。独立共和派の規模(三五議席)は最小勝利連合を形成するのに最適であった。このUNR/UDT・RI連合は、第五共和政の下で誕生した、明確な境界線を持つ初の過半数勢力であった。そして、ジスカールはフォーマルな連合パートナーになることによって、やがてはゴリストの遺産相続人になる資格を獲得した。

一九六二年に、ドブレの後任首相に任命されたポンピドーは大統領の意を受けて議会内支持基盤の拡大にエネルギーを投入した。ジスカールとの連合には成功した。だが、ド・ゴール神話は、その説得力を確実に失ないつつあった。一九六五年大統領選挙では彼の魅力と集票能力が先細りに向いつつあることがはっきりと証明された。選挙前は圧勝を予想されたが、他の五人の候補(ミッテラン、ルカニユエ、ヴィ

表 3 : 1965年大統領選挙

候補者名		党派	得票数	得票率
第1回投票 (1965.12.9) 投票率84.7%				
ド・ゴール	新共和国連合	10,828,523	44.6%	
ミッテラン	社会党	7,694,003	34.7	
ルカニユエ	民主中道派	3,777,119	15.5	
ウニヤンクール		1,260,208	5.1	
第2回投票 (1965.12.19) 投票率84.3%				
ド・ゴール	新共和国連合	13,083,699	55.1	
ミッテラン	社会党	10,619,735	44.8	

* Pierre Avril, 1969, p.113.

ニヤンクール、マルシラシ、バルビュ)が、「ド・ゴール退陣」を求めて、反ド・ゴール包囲網をひき追い上げた。特に《民主社会左翼連合FGDS》と共産党の支持を得て、「人民戦線」連合の性格と実質を与えられたミッテラン候補が善戦した。ド・ゴールは第一回投票で、大方の予想に反して、僅か四四・六%しか獲得できず、不名誉にも、決戦投票に持ち込まれてしまった。フランスの栄光を強調する七五歳の老政治家は決戦投票までの二週間、積極的にテレビ出演し、攻勢に出た。この効あって当選してきたものの、決選投票に持ち込まれたという事実と得票率五五・一% (ミッテランは四四・八%) という数字は、後継者問題がいずれ差し迫った問題として浮上してくるであろうことを予測させるに十分であった(表

3 参照)

ド・ゴールの人気は明らかに凋落しつつあった。ボンピドー首相がそれを一番認識していた。彼は、カリスマ・リーダーの権威が衰退してしまった時に、有効で凝集力の強い政府を支えることができる過半数勢力を組織することが何よりも必要であると考えていた。一九六七年三月の国民議会選挙(五年間の任期満了選挙)では、独立共和派との連合をフォーメライズすることに成功した。《第五共和政民主連合UDVe》という共通の旗の下で選挙戦に臨んだ。新共和国連合・民主労働連合UNR/UDTは、四〇七名の候補者を擁立しながら二〇一名しか当選させることができず、三二議席も後退してしまった。連合パートナーである独立共和派は善戦して七議席伸ばした(候補者七九名、

表4：1967年国民議会選挙(1967.3.5/12)
(投票率81.1%)

政党名	得票率(前回比)	議席数(前回比)
UNR(新共和国連合)	32.2%	201(-33)
RI(独立共和派)	5.5	44(+9)
与党連合(第五共和政民主連合)計	37.7(-0.1)	245(-24)
PCF(共産党)	22.5(+0.8)	73(+32)
PSU(統・社会党)	2.1	4(+4)
FGDS(社会党+急進派)	19.0(-1.4)	116(+11)
左翼連合計	43.6(-0.9)	193(+47)
CD(民主中道派)	13.4	41
その他	5.4	8

* J. R. Frears, 1977, p.215.

当選者四二名)。そのため、辛うじて過半数を維持できたが、過半数を上回ること僅か一議席(計二四五議席)では、高揚する学生運動とゼネ・ストの波に抗し切れなかった。しかも、この選挙では、左翼連合が選挙共闘を見事に開花させ、相互協力の精神で四七議席も上積みした。途絶なき権力拡張論者であるド・ゴールが新議会の政党配置図に不快感を持ったとしても当然であった。

労働者のゼネ・スト、工場占拠、学生暴動、過激なデモ、警官との衝突が相次ぎ、一九六八年五月には、左の嵐と混沌の恐怖がピークに達した。ド・ゴールは、国民議会を解散し、新選挙を要求した。ポンピドゥー首相が選挙キャンペーンを陣頭指揮した。《共和国民主連合UDR》と名を改めたゴッリストは、九六議席伸ばし、単独過半数のハードル(二四四議席)を大幅に超えた(二九六議席)。第五共和政が生み出した最初の単独過半数勢力となった。しかも連合パートナーである独立共和派も二〇議席上乗せして第二党に上昇した。与党連合の合計議席数は三六〇、議席占有率は実に七三・九%にも達した。五月と六月にフランスを襲った混沌と無秩序を混沌の恐怖と反共キャンペーンに結び付け、「法と秩序」を強調した与党連合は、前年度の選挙で大躍進した左翼連合から相互協力の精神を奪い去り、一〇二議席(五二・八%)も後退させた。ド・ゴールの後継者は、もはやこの有能な政党戦略家・ポンピドゥーを置いて他になかった。

表5：1968年国民議会議選挙(1968.6.23/30)
(投票率80.0%)

政 党 名	得票率(前回比)	議席数(前回比)
UDR(共和国民民主連合)	37.0%(+4.8)	296(+ 96)
RI(独立共和派)	7.7(+2.2)	64(+ 20)
与党連合(UDR)・計	44.7(+7.0)	360(+116)
PCF(共産党)	20.0(-2.5)	34(- 39)
PSU(統一社会党)と極左派	4.0	-(- 4)
FGDS(社会党+急進派)	16.5(-2.4)	57(- 59)
その他の左翼	0.7	-
左翼連合・計	41.2(-2.4)	91(-102)
PDM(進歩民主派)	10.3(-3.1)	33(- 8)
その他	3.5	3

* J. R. Frears, 1977, p.217.

● ポンピドーの連合政権

ド・ゴール(七八歳)が引退した後行なわれた一九六九年大統領選挙では、ゴリススト陣営の統一候補として出馬したポンピドー(五八歳)が勝利を収めた。さしたる混乱や反対もなく党首のポストを譲り受けたヘド・ゴールの皇太子は「ド・ゴール路線の継続と開放」をスローガンに、ジスカールデスタンと独立共和派からの確実な支持を得て、選挙戦に臨んだ(ジスカールデスタンは、「ゴリスストのアウトサイダーの中では最も好ましいド・ゴールの後継者」と考えられていたが、ポンピドーの出馬で、野望を「ポンピドー以後」につなぐことになった。ポスト・ポンピドーでは禅譲をあてにせず、正統ゴリー

ストであるシラクと激しく争い、奪取した)。

第一回投票では、隊陣整わぬ左翼陣営が四人の候補を乱立させたこともあって、過半数達成こそならなかったものの、二位以下を大きく引き離れた(得票率四四・一四%)。共産党のデュクロ候補が、左翼陣営の分裂、ソ連のチェコ介入という悪条件をはねのけて、第三位(得票率二一・四三%)になったことが注目される。六年間の首相実績を持つド・ゴールの約束された後継者は、第一回投票で前回大統領選挙でのド・ゴールの得票率(四三・七%)を上回り、その名にふさわしい遺産相続人であることを証明した。決選投票は、文字通りの楽勝で、開票から二時間半後には早くも勝利宣言を行なえた。ここでもポンピドーは、国民の間に広く拡散していた「五月の恐怖」を柔軟な政治姿

表 6：1969年大統領選挙

第1回投票 (1969.6.1)		投票率78.28%	
候補者名	党派	得票数	得票率
ボンピドー	共和国民連合	9,858,824	44.14%
ポエル	中道派	5,221,022	23.38
デュクロ	共産党	4,787,665	21.43
ドフェール	社会党	1,130,050	5.06
ロカール	統一社会党	815,512	3.65
デュカテル	無所属	285,736	1.28
クリビヌ	共産主義者同盟	237,758	1.06
第2回投票 (1969.6.15)		投票率69.01%	
ボンピドー	共和国民連合	10,801,932	57.78
ポエル	中道派	7,895,821	42.22

勢で吸収し、前回選挙でのド・ゴールの得票率を上回った(五七・七八%)。

新大統領は国民議会議長シャパンデルマスを首相に任命した。この連合政権には、独立共和派からジスカールデスタン(蔵相)、レイモン・マルスラン(内相)ら四人が入閣した。そして、ド・ゴール時代から議会内支持基盤の拡大に万全の注意を払ってきたボンピドーは、一九六八年から既に着手していた中道取込み策を一步進め、大統領選での連携実績を踏まえて、ルネ・プレバン(法相)、ジャック・デュアメル(農相)、ジョゼフ・フォンタネ(労働・雇用・人口問題相)の三名を中道派(進歩民主派PDM)から登用した。六八年国民議会選挙で単独過半数を制して圧勝したゴリストは、過去の経緯から独立共和派を連合パートナーとして極めて大型の過大規模連合を形成していた

が、ここで中道派の一部を包摂することによって、その(連合形成地位)は更に一層拡大した。超過大規模の形成は、連合パートナー間のイデオロギー距離拡大、閣僚ポスト配分の不公平増大を伴うので必ずしも好ましい戦略とは言えない。

だが、ボンピドーの貪欲な基盤拡張策は、一九七三年国民議会選挙(任期満了選挙)でその正しさを証明されることになった。この選挙で、《進歩の共和国民連合URP》という統一旗を掲げたゴリスト陣営は大きく後退することになった。共和国民連合は、実に一三議席失ない、ド・ゴールの魔力が過去のものであることが明らかになった。連合パートナーである独立共和派も九議席失なった。両党だ

表7：1973年国民議会選挙(1973.3.5 '11)
(投票率81.3%)

政党名	得票率(前回比)	議席数(前回比)
UDR(共和国民主連合)	25.7%(-11.5)	183(-113)
RI(独立共和派)	6.6(-1.1)	55(-9)
CDP(中道民主進歩派)	3.7	30
(与党連合・計)	36.0(-8.7)	268(-92)
PCF(共産党)	21.4(+1.4)	73(+34)
PSU(統一社会党)と極左派	3.3	1(+1)
PS(社会党)とMRG(左派急進運動)	20.8(+4.3)	101(+44)
その他の左翼	0.3	1
(左翼・計)	45.8(+4.6)	176(+85)
REF(改革運動)	13.1	34
親与党連合小党	0.7	5
その他	4.4	7

●ジスカールデスタンの連合政権

一九七四年四月二日、ボンピドー大統領(六二歳)が任期を二年残して急死した。ド・ゴール路線の継承者であるボンピドーの死は、「ド・ゴール以後」を加速した。

前年度に行なわれた国民議会選挙の第一回投票で与党連合を得票率で圧倒した左翼連合は、その好調を裏証するために、迅速な行動に出た。社共両党の共同政府綱領を基礎にして、社会党のフランソワ・ミッテランが素早く左翼統一候補として準備され、活発な選挙キャンペーンが展開された。一方、ゴリススト陣営では、候補者調整が難航していた。ド・ゴール連合政権、ボンピドー連合政権を支えた二つの柱が「継承権」をめぐって激しく争ったため、候補

けでは合計二三八議席にしかならず、過半数のハードル(二四六議席)をクリアできなかった。中道派の一部(この選挙で《中道民主進歩派CDP》を名乗った)を六八年以来、与党連合に取り込み、六九年大統領選挙でフォーマルな連合パートナーに仕立て上げていたおかげで、辛うじて議会内過半数を維持できたのである。中道民主進歩派の三〇議席を加えても与党連合(二六八議席)の議会内基盤は大幅に縮小した(六八年国民議会選挙後に比べ九二議席減、六九年大統領選挙後に比べ一一七議席減)。「ド・ゴール以後の時代」が駆け足でやってきた。

者を一本に絞れないでいた。共和国民主連合は、正統ゴーリストの自負心を背景に、元首相シャバンデルマスとポンビドーの後継者として決定した。連合パートナーである独立共和派は、蔵相ジスカールデスタンを大統領候補に決定した。結局、保守陣営は候補者一本化に成功せず、苦しい戦いになると予想された。

シャバンデルマスとジスカールデスタンは陣営の両側で戦火を交えねばならなかった。左翼統一候補ミッテランとの戦いと並行しながら、ゴーリストの支持を求めて、ポンビドー政権の〈継承合戦〉を展開せねばならなかった。エリゼ宮のイスを射程に収めるためには、第一回投票でミッテランの圧勝を阻止し、しかも自分が第二位につけるとが前提である。特に、議席数僅か五五の小党を背景にしているだけに、ジスカールデスタンにとっては、これは困難ではあっても突破しなければすべての野望が破砕してしまいう至上命令であった。彼はその華麗な経歴（名門エコー・ポリテクニク、高級官僚の登竜門エナを最優秀の成績で卒業、三〇歳で代議士、三一歳で大蔵次官、三二歳で大蔵大臣）から、政界のプリンスと称されていたが、この「生まれながらの皇太子」はまた、比類なき野望と卓抜の政党戦略の持ち主でもあった。小党を率いながらも万年与党の地位を占め、ド・ゴール財政を支えた力量が、ナポレオン以来の若さ（四八歳）で権力の頂点を極めさせることになった。

第一回投票では、予想通り、ミッテランが二位以下を大きく引き離れた（四三・三六％）。第五共和政発足以来、左翼陣営が手にした最良の結果であった。当然のことながら、決選投票に向けて選挙戦は過熱した。だが、左翼連合の意気が上がれば上がるほど、保守・中道陣営は、社共連合に完全に包囲されてしまうのではないかとという危機感で凝集力が強まり、ネガティブな連帯（受け身の連帯）で結束するようになった。決選投票では、これまでになく多くの市民が投票場に足を運んだ（投票率八七・七八％）。そして、ジスカールデスタンが、ネガティブな連帯をバネに

表 8 : 1974年大統領選挙

第1回投票 (1974.5.5)		投票率 84.9%	
候補者名	党派	得票数	得票率
ミッテラン	社会党	10,935,763	43.36%
ジスカールデスタン	独立共和派	8,286,382	32.85
シャバンデルマス	共和国民主連合	3,693,168	14.64
第2回投票 (1974.5.19)		投票率87.78%	
ジスカールデスタン	独立共和派	13,214,643	50.7
ミッテラン	社会党	12,842,834	49.3

保守・中道陣営の票を結集し、約四〇万票という僅差ながらも、エリゼ宮への入場切符を手にするようになった。

バレリー・ジスカールデスタンはボンピドーに劣らぬ政党戦略家であった。小党を率いて常に政権の一翼を担うためには卓抜の戦略家でなければならなかった。そして小党のリーダーでありながら大統領のポストを手にした今、戦家としての力量が一層問われることになった。政権基盤の拡大を目指して「新しい多数派」をどのように形成するか。ジスカールの未来はこれにかかっていた。

当選後、新大統領は、ゴリストの共和国民主連合のリーダーでありながら、自党のシャバンデルマスよりジスカールに接近したジャック・シラク（四一歳）を首相に任命し、ネガティブな連帯を形成した努力に報いた。連合パートナーとして、共和国民主連合を外すことは、過去の経緯から言っても、できるわけはない。だが、大統領選挙で苦しめられたことも事実である。ジスカールは組閣に当って、共和国民主連合の閣僚ポストを一一から五に削減し、しかもシャバンデルマスの強い政治家は慎重に回避した。その一方で、ネガティブな連帯の形成に当って大きな力を発揮した中道派、とりわけ『改革運動 R E F』には法相（ジャン・ルカニエ五四歳）、行政改革相（ジャンジャック・セルバンジュレベール 五〇歳）など四ポストを与えて、積極的に連合パートナーとして取り込んだ。そして、同じく中道派でも、シャバンデルマスを支持した与党中道派、デュアメル派は

閣内から排除した。こうした徹底的な論功行賞人事は、任期（七年）が定まった大統領制では珍しいことではない。だが、弱小政党を背景にした大統領にとっては、危険な賭けであるかもしれない。

冷徹な計算能力を持つこのテクノクラート大統領の戦略は、最終的には、一種の〈超然主義政権〉の樹立を狙いとしていたようである。ジスカールは権力基盤を拡大するには、長期低落傾向をはっきり示しているゴーリストへの依存を弱める以外にないと考えた。そのため、大統領府に権限を集中しながら、〈脱ド・ゴール〉主義的政策を進めようとした。正統派ゴーリストのシラク首相は首相権限の制限という点でも、ド・ゴール路線の破棄という点でも、ジスカール大統領の行動に同意できなくなった。両者の関係は、政権樹立後二年たった頃急速に冷却化した。一九七六年八月、シラク首相は大統領に辞表を提出した。大統領はこれを受理し後任首相にパール対外貿易相（五二歳）を指名した。

シラク首相放逐によって、大統領職にも首相職にも正統ゴーリストを含まぬ政権が第五共和政史上初めて出現することになった。シラクはこれに反発し、一九七六年にゴーリストを新しく《共和国連合RPR》に再結集した。そして、七七年のパリ市長選ではジスカール派の候補を破りその健在ぶりを誇示した。

ゴーリズムの遺産が残り少ないことを熟知していたジスカールデスタンは、独立共和派を改組した《共和党》を中心に、旧中道諸派（《社会民主中道派》、《急進党》）を結集して、《フランス民主連合》を組織した。社共連合の優勢が予想された一九七八年国民議会選挙では善戦し、ゴーリストの《共和国連合》に肉迫する一三七議席獲得した。与党連合は、苦戦を予想されながらも、二九一議席獲得した。しかも、ジスカールの希望通り、ジスカール派の相対的比重を高めた上での勝利であった。ジスカールの戦略は成功した。

表9：1978年国民議会選挙(1978.3.12/19)
(投票率85%)

政党名	得票率	議席数(改選前)
共和国連合(ゴーリスト)	26.11(%)	148 169
フランス民主連合	23.18	137 113
共和党(旧独立共和派)		(62)
社会民主中道派		} (51)
急進党		
大統領派	} 1.20	4
その他(与党系)		2
(与党連合・計)	50.49	291 (297)
社会党	28.31	103
左派急進運動	2.33	10
共産党	18.62	86 74
(左翼連合・計)	49.26	199 (177)
極左	0.25	1 1

だが、ジスカールに不安材料がないわけではなかった。勝利を目前にして敗北した左翼連合は一九九議席にとどまったが、第二回投票での与党連合との票差は僅か三二万一九六〇票に過ぎなかった。議席差では九二議席もひらき地滑りの勝利を許したが、票差では紙一重まで迫ることに成功した。この結果を見る限り、ジスカールが今一度(新しい多数派)の形成に着手し、それを実現できなければ、有権者の気紛れ次第で逆の結果が生まれる可能性がある。

● ミッテランの連合政権

一九八一年の大統領選挙は、戦後政治における一つの時代の終焉、逆に、新しい歴史の開幕を告げる選挙となった。社会党のミッテラン(六四歳)が一六年間にわたる三度目の挑戦で大統領のポストを手にした。第五共和政発足以来初の左翼大統領の出現である。六五年大統領選挙では左翼統一候補として出馬しながらド・ゴールに敗れた(第一回目の挑戦)。七四年大統領選挙では、共産党との間で調印した共同政府綱領(七二年六月)を基礎にして、ジスカールデスタンに左翼統一候補として挑戦したがまたしても敗北した(第二回目の挑戦)。七七年九月に国有化問題で左翼連合が事実上決裂し、七八年国民議会選挙で勝利を予想されながら共産党の造反によって左翼連合が大敗北を喫した時、ミッテランの未来を明るくいイメージで描くことは困難であった。だが、対独レジスタンス運動に参加した

表10：1981年大統領選挙

第1回投票 (1981.4.26)		投票率 82%	
候補者名	党派	得票数	得票率
ジスカールデスタン	フランス民主連合	8,017,930	28.03%
ミッテラン	社会党	7,440,189	26.01
シラク	共和国連合(ゴーリスト)	5,154,153	18.02
マルシェ	共産党	4,392,741	15.35
第2回投票 (1981.5.10)		投票率 %	
ミッテラン	社会党	15,639,673	52.06
ジスカールデスタン	フランス民主連合	14,396,439	47.93

経験を持つこの政治家は政治生命を終わらせるところか、その豊かな政治経歴で培った変幻自在の戦略を駆使して党内対抗馬を抑え、三度目の挑戦権を獲得したばかりか、遂には現職大統領を破ってしまったのである。

三度目の挑戦は、世界的な保守ブームと左翼連合のたそがれが囁かれていたさなかでの挑戦であり、社共がそれぞれ独自候補を立てての戦いであった。共産党のマルシェ候補は、四月二六日の第一回投票で得票率一五・三五%（第四位）に低迷し、七八年国民議会選挙での得票率（二〇・五五%）を大きく割り込んでしまった。党中央委員会は四

月二八日には、早くも決選投票ではミッテランを支持する方針を決定した。左の票がミッテランに流れるであろうことはこの段階で予測できた。問題はシラク票の行方であった。正統ゴーリストのシラク候補は、前回大統領選でのシャパンデルマス候補の得票率（一五・一%）を大幅に上回る票（一八・〇二%）を獲得し、善戦した。ジスカールのゴーリストに対するここ数年の姿勢は正統ゴーリストにとって好ましいものではなかった。シャパンデルマス、シラクとジスカールの個人的対抗意識も完全に解消していたわけではなかった。ジスカールのパソナリテイや政策スタイルを極端に嫌うシラクの票（約五一五万票）のすべてがジスカールに流れると思えなかった。その一部が棄権もしくはミッテランに向う可能性は否定できなかった。ジスカールは十分にそれを認識していた。第一回投票の結果が判明した夜、ただちに「シラク、ドブレ氏らに対し何ら感情的対立はない」とことさらに強調しなげ

表11：1981年国民議会選挙(1981.6.14 21)
(投票率76%)

政党名	得票率	議席数(前回比)
社会党(十左派急進運動)	49.28%	285(+182)
共産党	6.98	44(-42)
(左翼連合・計)	56.26	329(+140)
共和国連合(ゴーリスト)	22.46	83(-65)
フランス民主連合	18.64	64(-73)
右翼諸派	2.19	8(-2)
左翼諸派	0.52	4(+3)

ればならなかったのはそのためであった。一位にはなったものの、ミッテランの予想外の躍進に直面したジスカールは、保守・中道派の大結集を短期間に実現しなければならなくなった。だが、前回大統領選挙以後の連合形成スタイルから判断して、形ばかりの和解声明や協力要請だけでそれが実現できるとは思えなかった。

決選投票では、ミッテランが第一回投票の好調を持続して、一〇〇万票強の差をつけて当選した。「絶望の瞬間にも不屈の楽天的な展望を堅持」^⑪してはいたが、「ごく最近までは敗北と挫折の同義語」^⑫とまで称されていた人物が、遂にエリゼ宮の鍵を手に入れた。彼は、社会党右派のピエール・モーロワ(五二歳)を首相に任命した。新大統領の(永遠のナンバー・2)と称されるモーロ

ワは、党内結束を重視する穏健な改良主義的社會主義者であり、革新連合の形成工作には不可欠の政治家である。新しい大統領と首相が直面していた第一の課題は、保守派によって支配されている国民議会を解散して、左翼優位の国民議会を作ることであった。

一九八一年六月の国民議会選挙(解散選挙)は、社会党の地滑りの圧勝で終わった。ミッテランとモーロワの思惑は、十分過ぎる程適中した。社会党は単独過半数のハードル(二四六議席)をいとも簡単にクリアーした(二八五議席)。第五共和政では、ド・ゴールだけが、しかもたった一度だけ(六八年選挙)経験できた完勝であった。モーロワ首相の誇らしげな勝利宣言が印象的であった。

「左翼、とりわけ社会党は今世紀最大の勝利を博した。社会党は安定した条件の下で、継続的に、その政策を実行に移す合法的手段を獲得した。社会主義の時代が遂に来たのだ」⁽¹³⁾。

社会党があまりにも圧勝したために、ミッテランは新しい課題に直面しなければならなかった。連合形成のパターンについてである。選択肢は二つであった。第一は、〈単独過半数政権〉案。社会党が単独で政権を担当し、共産党にはインフォーマルな連合パートナーとして閣外協力を仰ぐ。〈数の論理〉に従えば、これが常道であろう。議会内支持基盤に不安はないし、閣僚ポストの配分についても〈政党内政治の論理〉だけで処理できる。アメリカをはじめとする西側諸国の懸念もある程度解消できよう。だが、第五共和政の発足以来、多くの場合、伝統的・固定的な連合パートナーとして相互協力関係を維持してきた共産党を閣外に排除することは、長期的展望に立てば、好ましい戦略ではないかもしれない。奇跡に近い圧勝が続くとは思えない。また、社会主義的改革政治の断行には、とりわけ労働勢力からの統一的支持が必要であるが、単独政権に踏み切れば、共産党系労働組合の造反に直撃される可能性もある。第二の選択肢は〈過大規模連合政権〉案。共産党をフォーマルな連合パートナーとして閣内に迎え、閣僚ポストをいくつか提供する。社共連合の伝統を維持できよう。長期政権を狙うとすれば、一過性の〈数の論理〉よりも信義を重視したこの選択肢の方が賢明であるかもしれない。単独過半数のハードルを連続してクリアーできる保証などフランスの政党政治にはないからである（ド・ゴールですら果たせぬ夢であった）。その意味では、長期的な政治保険であると評価できるであろう。また、共産党を取り込むことによって、共産党系労働組合の攻勢を緩和する防波堤を補強・強化することもできよう。共産党に提供する閣僚ポストは、共産党を連帯責任者に仕立て上げるための必要経費であると言えよう。パブリック・オピニオンの巨大な伝導ベルト⁽¹⁴⁾として共産党を背後から支えている《フランス労

働総同盟CGT》を野に放ったまま左翼政権が円滑に作動するようには思えない。⁽¹⁶⁾

だが、問題がないわけではない。〈連合形成地位〉に不安が残る。〈数の論理〉を単純に適用すれば、議院内支持基盤が拡大すればそれだけ政権の安定度が高まると考えられるかもしれない。しかし、重要なのは絶対議席数ではなく〈連合形成地位〉である。社共連合の〈連合形成地位〉は明らかに〈過大規模連合〉である。つまり、議院内議席の過半数（五〇％プラス）を確保する上で〈余分な党〉を含んだ連合となる。〈過大規模連合〉は、想像される程には強くない。二つの時限爆弾を閣内に抱え込むからである。第一の時限爆弾は閣僚ポスト配分の不均衡とそれに伴う不満である。連合リーダーは、閣僚ポストの配分に当って〈政党内政治〉のみならず〈政党間政治〉をも考慮しなければならぬ。第二の時限爆弾は閣内不統一の危険である。第二のバイオリンの地位に満足しなくなった時には、何よりも先ず、重要ポストの要求という形で具体的な地位改善を迫ってくるであろう。その際、〈余分な党〉の処遇をめぐって、とりわけ過半数政党内で意見が対立するであろう。ジュニア・パートナーが哲人の如き禁欲の精神を持ち続けぬ限り、また、単独過半数政党が限りなき寛容の精神を持ち続けぬ限り、〈過大規模連合〉はポスト配分に端を発する閣内不統一の危機に絶えず直面しなければならない。第二の時限爆弾はイデオロギー距離の拡大である。炸裂の可能性はこちらの方がはるかに大きい。連合リーダーは、政策の立案からその実施に至るすべての過程で、〈政党内政治〉と〈政党間政治〉を配慮しながら、意見の調整に当らなければならないが、イデオロギー指向の強い政党を含む〈過大規模連合〉の場合には、〈招聘妥協〉（算入妥協）は期待できず、せいぜい〈切断妥協〉（減算妥協）⁽¹⁶⁾しか期待できないため、よりイデオロギー指向の強い政党の内部に欲求不満を累積させることになる。ジュニア・パートナーがイデオロギー純

表12：フランス第五共和政の政権（1958～）

政 権	政権担当政党	与党議席数(占有率)	政権パターン
ド・ゴール 1958～1969			
1958 議会選挙	UNR	199	
1962 議会選挙	UNR-UDT+RI	233+37=270 (56.0%)	P⑦最小勝利連合政権
1965 大統領選挙	UNR-UDT+RI	決選投票得票率 (55.1)	
1967 議会選挙	UDVe+RI	201+44=245 (50.3)	P⑦最小勝利連合政権
1968 議会選挙	UDR+RI	296+64=360 (73.9)	P⑧過大規模連合政権
ボンビドー 1969～1974			
1968 議会選挙以後	UDR+RI+PDM	296+64+25=385 (79.1)	P⑧過大規模連合政権
1969 大統領選挙	UDR+RI+PDM	決選投票得票率 (57.8)	
1973 議会選挙	UDR+RI+CDP	183+55+30=268 (54.7)	P⑦最小勝利連合政権
ジスカールデスタン 1974～1981			
1973 議会選挙以後	RI+UDR+UC+REF	55+183+30+34=302(61.6)	P⑧過大規模連合政権
1974 大統領選挙	RI+UDR+UC+REF	決選投票得票率 (50.7)	
1978 議会選挙	UDF+RPR+その他	137+148+6=291 (59.3)	P⑦最小勝利連合政権
ミッテラン 1981～			
1981 大統領選挙	PS+MRG+PCF	決選投票得票率 (52.1)	
1981 議会選挙	PS(+MRG)+PCF	285+44=329 (67.0)	P⑧過大規模連合政権

- *ゴースト系 UNR=新共和国連合、UDT=民主労働連合、UDVe=第五共和政、UDR=共和国民連合、RPR=共和国連合。
- *ジスカール系 RI=独立共和派、UDF=フランス民主連合。
- *中道派 PDM=進歩民主派、CDP=中道民主進歩派、UC=中道連合、REF=改革運動。
- *左翼系 PS=社会党、MRG=左派急進運動、PCF=共産党。

度がある程度犠牲にしてもスタンド・プレーは慎しもうという禁欲の精神を持ち続けぬ限り、また、連合政党の支持者が野党の発想法と政権党の行動様式には大きな違いがあることを認めるだけの寛容の精神を持ち続けぬ限り、(過大規模連合)は、イデオロギー距離の拡大に帰因する閣内不統一の恐怖に常に脅かされよう。ゴースト・ブロックの支持者に比べれば、左翼ブロックの支持者の政治的同質性ははるかに小さい。ゴースト・ブロックの場合には、内的緊張があったとしても、選挙戦に入れば、まるで単一政党であるかの如く行動することもあるが、左翼ブロックにはそれは望めない⁽¹⁷⁾。一九七二年六月に社共両党が調印した共同政府綱領の寿命が僅か五年間であったという事実、社共統一候補で戦った二度の大統領選挙で敗北し、独自候補で戦った大統領選挙で勝利したという事実、七八年国民議会選挙で共産党が

造反し左翼連合が大敗北を喫したという事実、はこの案の選択につきまとう懸念であろう。

ミッテランは第二の選択肢を選んだ。三〇歳で代議士に初当選し、すぐに大臣に登用されて以来、専ら小党運動を指導してフランス政界に名を成したミッテランは、同じく若くして大臣に登用され小党運動を通じて大統領のポストを手にしたジスカールデスタンと同様、大規模連合を選択した。政変が絶え間なく続いた第四共和政で、弱小政党に属しながらも一回も閣僚ポストを手にしたたかさが〈過大規模連合〉乗りこなしの自信につながったのである。共産党には運輸相(シャルル・フィテルマン)、行政改革相(アニセ・ルポル)など四つの閣僚ポストが配分された。共産党は、三四年ぶりに政権に参加することになった。いずれの時限爆弾にせよ、その起爆装置は、遅くとも次期選挙の一〜二年前に作動すると予想すれば大胆に過ぎるであろうか。

— 以上のように、第五共和政下の政党政治は多数派形成を中心に作動する二極システムを定着させた。決選投票制を伴なう大統領直接選挙制度がこうした政党政治の二極化を加速した理由の一つであることは否定できないであろう。

そして、この政党政治システムを母胎にして誕生した政権は、例外なく連合政権であった。単独過半数政党が二度生まれましたが、いずれもが連合政権を選択し、過大規模連合政権を形成した。

第五共和政では、連合政権こそが常態である。「大統領は二つの連合を構築しなければならぬ。一つは、大統領に当選するための連合であり、もう一つは七年間にわたって政権を維持するための連合である」⁽¹⁸⁾。政党の可塑性が強いため〈過大規模連合〉への衝動が強いが、迫仲を前提とした〈最小勝利連合〉が一般的である。

注

- (1) 〈極端な多党制(分極的多党制)〉については、G・サルトーリ 岡沢憲夫・川野秀之訳『現代政党学Ⅰ・Ⅱ』早稲田大学出版部(一九八〇年)を参照されたい。
- (2) J. R. Fears, *Political Parties and Elections in the French Fifth Republic*, London: C. Hurst and Company, 1977, pp. 1-14.
- (3) Pierre Avril, *Politics in France*, Penguin Books, 1969, p. 86.
- (4) M・デュヘルシエ 西川長夫・天羽均訳『ヨーロッパの政治構造』合同出版(一九七四年)一八〇頁。
- (5) J. R. Fears, op. cit., p. 209.
- (6) J. R. Fears, *ibid.*, p. 209.
- (7) Roy C. Macridis and Robert E. Ward (eds.), *Modern Political Systems: Europe*, Englewood Cliffs: Prentice-Hall, 1972, p. 230.
- (8) Henry W. Ehrmann, *Politics in France*, Boston: Little, Brown, 1971, p. 227.
- (9) 若きシニェル・ロカールが最有力対抗馬であったが、後に首相に任命されたモーロワが党内調整に当たった。
- (10) 『日本経済新聞』一九八一年四月二七日。
- (11) 藤村信「さくらんぼうの美るとき」『世界』(一九八一年)一〇月号 一二〇頁。
- (12) 藤村信 前掲 一一七頁。一九八一年大統領選挙の推移と解説については前掲論文を参照されたい。
- (13) 『朝日新聞』一九八一年六月二二日。
- (14) Lowell G. Noonan, France, in Peter H. Merkl (ed.), *Western European Party Systems*, New York: The Free Press, 1980, p. 107.
- (15) フランスの労働運動については、G・マルチネ 熊田亨訳『七つの国の労働運動・下』岩波書店(一九八〇年)一〇五七頁を参照されたい。
- (16) 招聘妥協、切断妥協については、岡沢憲夫「スウェーデン議会政治史研究——序説(一)」『政治学研究』(一九七一年)一号 三八〜四八頁を参照されたい。

- (17) Roy Pierce, French Legislative Elections: The Historical Background, in Howard R. Penniman (ed.), *The French National Assembly Election of 1978*, American Enterprise Institute for Public Policy Research, 1980, p. 35.
- (18) Vincent Wright, *The Government and Politics of France*, London: Hutchinson, 1978, p. 124.